

改訂レッドリスト
付属説明資料

爬虫類・両生類

平成 22 年 3 月

環境省自然環境局野生生物課

はじめに

「付属説明資料」は、平成18年12月及び平成19年8月に公表された改訂版レッドリストにおいて新規に掲載された種を基本に、それらの生息状況等を簡潔に解説したもので、本冊子は、その「爬虫類・両生類」版です。

すでに刊行されているレッドデータブックと合わせて、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く活用されることが望まれます。

改訂レッドリストの詳細については、以下のwebページを参照してください。

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=7849>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8648>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8886>

掲載種と解説内容

平成18年12月22日に公表された爬虫類・両生類改訂レッドリストに掲載された92種・亜種の中から、同リストに新規に掲載された45種・亜種について、以下の内容を簡潔に解説しました。なお、記載内容は原則としてレッドリスト公表時のものです。

- カテゴリー区分（新ランク及び[新規掲載]の表記）
- 目名、科名
- 和名
- 学名、記載者名、記載年
- 生息状況等、以下の項目を簡潔に記載
日本における固有性／形態と特徴／分布の概要／
生息地の現況とその動向／存続を脅かしている原因とその種の危機の状況／保護対策
（存続を脅かしている原因は、できる限り記述の統一を図るために、原則として別表に挙げたタイプ区分を用いコードを付記した。）
- 参考文献

■原因のタイプ区分表

森林伐採 11	湖沼開発 12	河川開発 13
海岸開発 14	湿地開発 15	草地開発 16
石灰採掘 17	ゴルフ場 21	スキー場 22
土地造成 23	道路工事 24	ダム建設 25

水質汚濁 31	農薬汚染 32	
園芸採取・観賞用捕獲・狩猟 41	薬用採取 42	
その他不法採集など 43	踏みつけ 51	
捕食者侵入 52	管理放棄 53	
遷移進行・植生変化 54	火山噴火 55	
帰化競合 56	異種交雑・放流 57	
産地局限 61	近交化進行 62	その他 71
不明 99		

執筆

執筆はつぎの方々にお願ひし、執筆者名を種ごとの記載の末尾に明記しました。

太田英利（兵庫県立大学自然・環境科学研究所）

草野 保（首都大学東京大学院理工学研究科）

竹中 践（東海大学生物理工学部）

福山欣司（慶応義塾大学経済学部）

松井正文（京都大学大学院人間・環境学研究科）

今後の対応

環境省では、レッドリストや本冊子について広く普及を図ることで、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存への国民の理解を深めるとともに、関係省庁や地方公共団体等に配布することにより各種計画における配慮等を促す予定です。

また、レッドリストの掲載種の中で特に保護の優先度が高い種については、さらに生息状況等に関する詳細な調査の実施等により情報収集を行い、その結果及び生息・生育地域の自然的・社会的状況に応じて「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づく国内希少野生動植物種に指定する等、必要な保護措置を検討します。

なお、レッドリストは、今後とも、5年ないし10年ごとに再調査と見直しを行う必要があるものと考えられます。

環境省自然環境局野生生物課

トカゲ目 トカゲ科

アオスジトカゲ

Plestiodon elegans (Boulenger, 1887)

大陸東部や台湾などに分布し、国内では尖閣諸島の魚釣島、南小島、北小島、黄尾礁だけに見られる。全長 145～172mm。後鼻板がなく、大腿部の後側に不規則な形状の大型鱗のかたまりがあり、また後肛板の 1 対にキールがある。胴部の体鱗は国外の集団ではふつう 26 列であるが、尖閣諸島のものでは 28 列の場合が多い。幼体の地色は黒色ないし暗褐色で、5本の白色ないし淡黄色の縦条が走る。幼体の尾は、国外の集団では全体が青色の場合が多いが、尖閣諸島の集団では先端側の半分のみが青色で、基部側の半分は褐色。幼体色は成長とともに失われ、成体では尾も含め全体的に褐色となる。雌は地下の空所に 6、7 個産卵し、孵化まで保護する。孵化期は 6 月下旬で、全長 73mm ほどの幼体が生まれる。

国内の産地は全部合わせても 7km² たらずの範囲であり、小面積に極限されている (61)、しかもそのうち最大の生息地である魚釣島では、野生化したヤギによる植生の破壊が進んでいる (54)。近年、このような環境悪化に関する科学的知見が得られ、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 58)、61)、107)、108)、109)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 カナヘビ科

ミヤコカナヘビ

Takydromus toyamai Takeda & Ota, 1996

日本固有種。宮古諸島に分布。明るい草地に生息する。全長 160～220mm、頭胴長 45～60mm。背面は草色で淡褐色がかかることもある。アオカナヘビと体色は似ているが、アオカナヘビに見られる頭胴部側面の白線がない。また、雌雄同色である。咽頭板は 4 対、鼠径孔は 2 対でアオカナヘビと同様だが、腹面鱗列数がアオカナヘビ 6 列に対してミヤコカナヘビは 8 列。1 年に複数回産卵し、1 回に 2 卵を産む。

農耕地周辺の環境変化や疎林の伐採 (11)、外来捕食者としてのイタチの放逐・増殖 (52) といった要因により、生息の確認される地点が近年急激に減少してきている。また、生息が確認される地点においても見られる個体数はきわめて少ない。また、ペットとしての捕獲・採取 (41) も危惧される。減少要因は軽減されておらず、減少が進んでいることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 74)、96)、97)、106)

執筆者：竹中 踐 (東海大学生物理工学部)

トカゲ目 ヘビ科

シュウダ

Elaphe carinata carinata (Günther, 1864)

大陸東部や台湾などに分布し、国内では尖閣諸島の魚釣島、南小島、北小島だけに見られる。尖閣諸島ではこれまで海岸近くの草地や灌木の群落周辺、ガレ場などで発見されている。全長1,320~2,200mm。キールの発達した体鱗が頸部で21~25列、胴中央で23列、肛門前で15~19列ある。腹板は210~225枚、尾下板は85~100対。背面は黒ずんだベージュ色ないし褐色で、緑みを帯びることが多い。体の前半部には不明瞭な黒色の小斑が、不規則に散らばる。腹面はややくすんだ黄土色ないし黄緑色で、背面よりも明るい。尖閣諸島での生態については不明な点が多いが、国外の例から考えて、他の爬虫類や小哺乳類、鳥類を捕食していることが考えられる。

国内の本種の唯一の分布地である尖閣諸島の上記3島は、合わせても5km²たらずの面積で、きわめて極限されている(61)。しかもそのうち最大の生息地である魚釣島では、野生化したヤギによる植生の破壊が進んでいる(54)。近年、このような環境悪化に関する科学的知見が得られ、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 46)、61)、107)、108)、109)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 アガマ科

ヨナグニキノボリトカゲ

Japalura polygonata donan Ota, 2003

日本固有亜種。八重山諸島の与那国島だけに分布する。おもに常緑照葉樹林に生息するが、こうした森林の周辺にあるやや開けた場所でも見られることがある。全長198~232mm。四肢や尾は細長く、同様に細長い指の先には鋭いかぎ爪を備える。鱗は頭部の背面や側面を除き瓦状で、つやがなく、そのほとんどにキールがある。胴部側面の鱗は周辺のものに比べ大型化しており、かつ不規則に配置されている。雄はくすんだ淡褐色で、背中には4、5個の不明瞭な暗色斑が並び、体側には不規則な形状の白斑が並ぶ。雌は鮮やかな緑色で、背中には雄と同様、4、5個の不明瞭な暗色斑が並ぶ。雌雄ともに、尾には10本前後の暗帯がある。アブ、アリ、小型の甲虫、ガなどを捕食する。飼育下で7月に、1雌が2個産卵した例があるが、繁殖の詳細は不明。

産地が面積約30km²の1島嶼に極限されており(61)、しかも照葉樹林の伐採(11)による生息地の縮小、観賞用の商取引を目的とした捕獲圧にさらされている(41)。2003年に新亜種記載され、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 57)、83)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

トカゲ目 カナヘビ科

サキシマカナヘビ

Takydromus dorsalis Stejneger, 1904

日本固有種。八重山諸島に分布。草地および明るい樹林に生息する。樹上性の習性が強く低木の樹冠と草むらを広く利用して行動する。全長 250～320mm、頭胴長 60～70mm。背面、側面は鮮やかな緑色で眼の前後に黒条がある。アオカナヘビなど他のカナヘビ属の種は背面の鱗が大きく角形であるのに対して、背面の鱗が小さく円形で背面は滑らかである。春から夏にかけて複数回、1～2卵を産む。

草地と樹林が混在し攪乱のない環境が本種の生息に好適であるが、石垣島ではすでにそのような環境は少なくなっている。西表島においても近年、疎林地域の農耕地開拓、道路建設 (24) などが急速に進み、生息地が急激に減少している。黒島では外来捕食者であるクジャクの放逐 (52) による影響が危惧される。これらの状況から、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 76)、100)

執筆者：竹中 踐 (東海大学生物理工学部)

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

トカゲ目 カナヘビ科

コモチカナヘビ

Lacerta vivipara Von Jacquin, 1787

イギリス、スペインなどからロシアにかけて広く分布し、国内では北海道のサロベツ原野周辺から稚内、猿払、浜頓別に分布する。北海道の分布はサハリンとともに本種の分布域の東端にあたる。国内の分布地ではおもに湿原内の草地に生息する。全長 140～180mm、頭胴長 55～75mm。背面は褐色で暗褐色の斑紋や縞模様がある。腹面は雌が淡黄色、雄はオレンジ色。胎生で5匹前後の羊膜に包まれた子を年に1回7月頃に産む。

好適な生息環境である北海道北部の湿原を中心とした生息地はもともと少なかったが、牧草地等の開発により減少し、限られた湿原でしか見られなくなっている。また、観光地となっている湿原では、ペットとしての捕獲・採集 (41) が危惧されることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 6)、77)、78)

執筆者：竹中 踐 (東海大学生物理工学部)

トカゲ目 ヘビ科

サキシマスジオ

Elaphe taeniura schmackeri (Boettger, 1895)

日本固有亜種。宮古諸島と八重山諸島に分布する。おもに雑木林や灌木林で見られるが、草地や民家の周辺で見つかることも少なくない。石垣島や西表島では、照葉樹林内の樹上で発見されることもある。全長 1,320～2,230mm。体鱗は、その多くに弱いキールを備えており、頸部で 27～29 列、胴中央で 25～27 列、肛門前で 19～21 列ある。腹板は 248～265 枚、尾下板は 103～126 対。背面は黄褐色ないし褐色で、やや緑みを帯びることもある。胴部には不明瞭な暗色の斑紋がおよそ 4 列に並び、尾部には左右に黒色の縦条が走る。ネズミやオオコウモリ、鳥などを捕食する。繁殖についてはほとんど知見がないが、7月に轢死した1雌の輸卵管から11卵が確認されている。

主要な産地である石垣島や西表島では最近、生息地周辺での交通量が増加しているため(71)路上での轢死と、それに伴う明らかな目撃頻度の低下が認められる。また宮古諸島では、人為的に移入されたイタチによる捕食の影響も受けている(52)。そのため今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 46)、67)、101)

執筆者：太田英利(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 コブラ科

クメジマハイ

Sinomicrurus japonicus takarai (Ota, Ito & Lin, 1999)

日本固有亜種。沖縄諸島の久米島、渡名喜島、阿嘉島、慶留間島、阿室島、座間味島、伊江島に分布する。おもに常緑照葉樹林や石灰岩植生内などの湿潤な環境に見られる。全長 320～501mm。体鱗は滑らかで、胴全体で 13 列。腹板は 163～190 枚。尾下板は 27～30 対。胴部背面はやや黄みを帯びた淡いオレンジ色で、黒色の太い縦条が 5 本走る。腹面はやや黄みを帯びた象牙色で、方形の黒斑が散らばる。5月に2雄によるコンバット行動が観察されている。餌は小型のヘビやトカゲと思われる。産卵期は6月の中・下旬と推定されるが詳細は不明。

本亜種の分布地の多くで、森林伐採(11)、石灰採掘(17)、土地造成(23)などに伴う生息環境の喪失が著しい。さらに阿嘉島、慶留間島、座間味島では人為的に移入されたイタチの影響で、他の多くの爬虫類と同様、ほとんど見られなくなっている(52)。1999年に新亜種記載され、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 59)、98)、101)

執筆者：太田英利(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 コブラ科

エラブウミヘビ

Laticauda semifasciata (Reinwardt, 1837)

東・南シナ海に分布する。日本は分布の北限で、琉球列島の近海に繁殖集団があり、サンゴ礁、岩礁、砂泥底などに生息する。全長は雄で740～1,330mm、雌で830～1,410mm。比較的太短く、横断面は胴の前部では丸いが後方では徐々に側偏し、尾は極端に縦長。前額板は3枚で、吻端板は上下に2分する。体鱗は胴のほとんどで21～23列。腹板は大型で195～210枚、尾下板は雄で37～43対、雌で32～38対。背面は青灰色、腹面はやや青みを帯びた黄色ないしクリーム色。暗褐色の横帯が、胴部、尾部にそれぞれ35～45本、5～7本ある。さまざまな沿岸魚を捕食する。雌は海岸沿いの洞窟や岩の割れ目の中で産卵する。国内の産卵場は西表島、中之神島、石垣島、宮古島、池間島、久高島、与論島、宝島、小宝島、諏訪之瀬島、口永良部島、硫黄島などにある。

近年、海岸開発(14)による産卵環境の悪化、サンゴの白化等の沿岸環境悪化に伴う餌の減少、食用としての捕獲や混獲(71)などが原因と思われる密度の低下が認められることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 19)、46)、55)、60)

執筆者：太田英利(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 コブラ科

ヒロオウミヘビ

Laticauda laticaudata (Linnaeus, 1758)

太平洋、インド洋の熱帯・亜熱帯に広く分布し、日本は分布の北限。琉球列島近海に繁殖集団があるほか、本土からも漂着が報告されている。サンゴ礁、岩礁、藻場などに生息する。全長はふつう480～1,360mmほどであるが、稀に1,500mmを越える個体もいる。細長い体型をしており、横断面は胴の前部では丸いが後方では徐々に側偏し、尾は極端に縦長。前額板は2枚あり、吻端板は2分しない。体鱗は胴のほとんどで19列。腹板は大型で、225～250枚、尾下板は中央で2分し、30～48対。胴の背面は青灰色、腹面は黄色で、黒色の環帯が胴部、尾部にそれぞれ30～60本、4～6本ある。ウツボなどを捕食する。卵生で、雌は海岸沿いの洞窟や岩の割れ目にもぐり込んで産卵する。産卵場は国内では西表島、石垣島、池間島、久高島、宝島、小宝島、口永良部島、硫黄島などが知られている。

近年、海岸開発(14)による産卵環境の悪化や、サンゴの白化等の沿岸環境悪化に伴う餌の減少(71)が原因と思われる密度の低下が認められることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 19)、46)、60)

執筆者：太田英利(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 コブラ科

イジマウミヘビ*Emydocephalus ijimae* Stejneger, 1898

トカラ海峡以南の琉球列島および台湾の近海に分布する。全長は雄で570~840mm、雌では630~1,070mm程度。比較的太短く、横断面は胴の前部では丸いが後方では徐々に側偏し、尾は極端に縦長。第2上唇板が著しく大型化しており、また成体の雄では吻端板の中央に顕著な突起がある。体鱗は頸部で15~17列、胴中央で17~19列、肛門前で15列。腹板は比較的大型で134~144枚、尾下板は対をなさず、雄で24~30枚、雌で19~24枚。体色はやや黄みのかかった肌色ないしクリーム色で、黒色ないし暗灰色の環帯が、胴部、尾部にそれぞれ25~30本、4~6本ある。サンゴ礁や周辺の砂地の場所に生息し、スズメダイをはじめさまざまな沿岸魚の卵を捕食する。胎生で、妊娠雌は11~1月頃、1~4幼体を出産する。生まれたばかりの幼体は全長300~340mmほどであるが、雌雄ともに2年前後で性成熟に達する。

近年、サンゴの白化等に伴う餌環境の悪化(71)が原因と思われる急激な生息密度の低下が認められることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 20)、21)、56)

執筆: 太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 ヤモリ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

オキナワヤモリ (通称クメヤモリ) *Gekko* sp. 1

日本固有種。沖縄島の北部といくつかの周辺島嶼だけに分布する。おもに自然度の高い照葉樹林とその周辺に分布し、島によっては石灰岩植生にも見られるが、開けた二次林や居住地といった、より人手の入った環境にはほとんど、あるいはまったく見られない。全長145~225mm程度で、島嶼間変異が著しい。ミナミヤモリに酷似するが、背中線上に並ぶ黒斑が左右に分離し“ハ”の字となる傾向を示す点でおおむね識別できる。近年、森林の伐採(11)や土地の造成(23)に伴う生息環境の縮小が見られるため、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 85)、86)

執筆: 太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 ヤモリ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

タカラヤモリ *Gekko* sp. 2

日本固有種。トカラ諸島の宝島と小島だけに分布する。集落内から森林内や岩場までさまざまな環境に見られる。全長140~190mm程度。間鼻板は大型で、成体雄にも前肛孔がなく、胴部背面の顆粒状鱗にやや大型の結節状鱗が混じり、側肛疣は単一の大型で肥厚した鱗からなる。以前は奄美諸島を含む比較的広い範囲に分布すると考えられていたが、種分類が進化した結果、実際には合わせても7km²程度の面積しかない上記2島に産地が局限されることが判明したため(61)、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 60)、87)

執筆: 太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 アガマ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

サキシマキノボリトカゲ *Japalura polygonata ishigakiensis* Van Denburgh, 1912

日本固有亜種。南琉球の西表島、小浜島、石垣島、伊良部島、宮古島などに分布。おもに自然度の高い森林に生息するが、石灰岩植生等のやや開けた場所にも見られる。全長 188~258mm。ヨナグニキノボリトカゲに似るが、雄の体側にある白色部分が分断されず、連続した1本の縦帯状である点、雌の地色が暗褐色、赤褐色ないしくすんだ緑色である点などで区別できる。森林の伐採に伴う生息環境の縮小(11)や、外来性の捕食者であるイタチによる捕食(52)の影響から生息範囲や個体数に縮・減少が見られるため、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 46)、53)、83)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 トカゲ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

オガサワラトカゲ *Cryptoblepharus boutonii nigropunctatus* (Hallowell, 1861)

日本固有亜種。日本の亜種は独立種として扱うべきとの意見もある。小笠原諸島と伊豆鳥島に分布する。父島列島と母島列島の集団が遺伝的に異なるとの指摘もある。森林、草原などに生息し、タコノキ疎林などに多い。外来爬虫類グリーンアノールと食物資源が重複し、アノールに捕食されることもある。父島では減少しており、集落内ではほとんど姿を消した。アノールの影響(52)により、今後母島でも減少が生じることが懸念されることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 73)

執筆者：戸田光彦 (自然環境研究センター)

トカゲ目 トカゲ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

イシガキトカゲ *Plestiodon stimpsonii* (Thompson, 1912)

日本固有種。与那国島を除く八重山諸島に分布し、海岸沿いの草地や石灰岩植生といった開けた環境から、照葉樹林内まで幅広い環境に生息する。全長 110~165mm。胴部の体鱗はふつつ 26 列。幼体の背面には同属の他種と共通する5本の淡色縦条に加え、左右の脇腹にさらに1本の淡色縦条が見られることが多い。以前はごくふつうに見られるトカゲであったが、外来性の捕食者であるイタチやクジャクの影響(52)などから近年、いくつかの島で減少傾向が著しく、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 13)、46)、51)、101)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 トカゲ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

オオシマトカゲ *Plestiodon marginatus oshimensis* (Thompson, 1912)

日本固有亜種。硫黄鳥島を含む奄美諸島とトカラ諸島南部に分布する。遺伝的な異質性が高く、与論島や沖永良部島の集団は、遺伝的にはむしろオキナワトカゲに近い。開けた環境を好み、森林には少ない。全長 155~220mm。体鱗列数は24列、26列、28列、30列、34列など島嶼集団間で変異が著しい。幼体の背面に見られる5本の淡色縦条のうち背中寄りの3本は尾内に伸びるが、その範囲は基部寄りの1/3程度に留まる。以前はごくふつうに見られるトカゲであったが、外来性の捕食者であるイタチやマンゲースの影響(52)などから近年、多くの島で減少が著しく、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 7)、13)、45)、46)、60)、101)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 トカゲ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

オキナワトカゲ *Plestiodon marginatus marginatus* Hallowell, 1861

日本固有亜種。沖縄諸島に分布する。低地の草地や雑木林の周辺に多く、村落の周辺にも見られる。丘陵地や照葉樹林には少ない。全長 150~210mm。胴部の体鱗はふつう 26 列。後鼻板がない。幼体の背面に見られる 5本の淡色縦条のうち背中寄りの 3 本は、尾の中央を越えて尾端方向へと伸びる。以前は最もふつうに見られるトカゲであったが、外来性の捕食者であるイタチやマングースの移入、定着に伴う影響 (52) などから近年、沖縄島など多くの島で減少が著しく、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 7)、13)、46)、98)、101)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 カナヘビ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

アムールカナヘビ *Takydromus amurensis* (Peters, 1881)

朝鮮半島から中国北東部、ロシア沿海州南部に分布し、国内では対馬に分布する。山地から丘陵にかけて沢沿いの明るい場所を中心に生活する。全長 220~260mm、頭胴長 60~80mm。孵化直後の幼体は全長 70mm 程度。地面の隙間に逃げ込む習性がある。年 2 回、6~7 月に 5 卵前後を産卵する。針葉樹の植林による沢周辺の生息環境への悪影響が進行しているほか、丘陵の谷の開口部の舗装道路の建設 (24)、宅地化などの開発が急速に進み、好適な生息環境が失われてきていることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 40)、75)、76)

執筆者：竹中 踐 (東海大学生物理工学部)

トカゲ目 ヘビ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

アカマダラ *Dinodon rufozonatum rufozonatum* (Cantor, 1842)

東アジアの亜熱帯・温帯域に分布する。国内の分布は対馬と尖閣諸島の魚釣島に限られる。森林、灌木林、草地、岩場といった幅広い環境に見られる。全長 600~1,250mm。体鱗はおおむね滑らかで、頸部で 19 列、胴中央で 17 列、肛門前で 15 列。腹板 190~215 枚、尾下板は 2 分し 60~87 対。背面の地色は赤褐色ないし紅色で、胴部と尾部にそれぞれ 50~80 本、15~30 本の暗帯がある。おもに爬虫類や両生類を捕食する。近年、対馬では森林の伐採 (11) や土地造成 (23)、魚釣島では野生化したヤギによる植生の破壊 (54) からそれぞれ生息環境の悪化が進んでいるため、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 46)、61)、101)、109)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 クサリヘビ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

トカラハブ *Protobothrops tokarensis* (Nagai, 1928)

日本固有種。トカラ諸島の宝島と小宝島に分布する。二次林、灌木林、草地、岩場などに生息する。全長 600~1,200mm。体鱗はキールをもち、頸部で 29~31 列、胴中央で 23 ないし 25 列、肛門前で 19 列。腹板 178~192 枚、尾下板は 2 分し 67~79 対。体色には明瞭な 2 型があり、ふつうは黄土色ないし淡褐色の地に暗色の楕円形斑が左右交互に並ぶが、ほぼ全身が黒褐色の個体も少なくない。合わせても 8km²程度の面積しかない上記 2 島に産地が局限されること (61)、にもかかわらず薬用や展示等の目的で継続的に捕獲されていること (41, 42) から今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 46)、60)、101)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

カメ目 バタグールガメ科

DD (情報不足) [新規掲載]

ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (Temminck & Schlegel, 1833)

日本固有種。本州、四国、九州と種子島、五島列島、佐渡島などの島嶼に分布。山間、丘陵の河川周辺や低湿地、湖沼および水田周辺に生息する。甲長は雄が14cm、雌が21cm程度。背甲は茶褐色、腹甲は黒褐色、頭部背面は黄褐色。雑食性で植物質、動物質を広く食する。秋から春にかけて水中で交尾し、6～8月に産卵する。低山地の沢周辺の樹林伐採(11)などによる環境悪化や土地開発(23)などによる生息地消失が進み、ペットの商業用捕獲(41)の影響で減少していると推定されることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 5)、40)、105)

執筆者：竹中 踐 (東海大学生物理工学部)

カメ目 スッポン科

DD (情報不足) [新規掲載]

ニホンスッポン *Pelodiscus sinensis japonicus* (Temminck & Schlegel, 1835)

日本の固有亜種。北海道を除く本土に在来分布。奄美諸島のものは外来集団。河川や池沼にすむ。甲長130～180mm。引っ込めると完全に甲中に収まる頭部と頸部は、伸ばすと甲より長い。吻は細長く先端は尖り、スノーケル状。沖縄県の島嶼には基準亜種の外来集団が見られるが、それらに比べ全体的に甲の長さに対する幅の割合が大きい。在来集団における、外来性の基準亜種からの遺伝浸透の実態、生息状況などに関する情報が不足。従来レッドリストに種 *Trionyx sinensis* として掲載されていたが、近年、在来集団の亜種帰属が明確になってきたため、今回、新たにこの亜種名でレッドリストに掲載された。

【参考文献】 46)、60)、62)、64)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 ヤモリ科

DD (情報不足) [新規掲載]

タシロヤモリ *Hemidactylus bowringii* (Gray, 1834)

東アジアの亜熱帯、温帯域に分布。国内では文献上は奄美大島以南の琉球列島の主要島のほぼすべてから記録があるが、標本にもとづく確実な記録は奄美大島と周辺島嶼のものを除くと宮古島と多良間島からのみ。全長105～128mm。背面の顆粒状鱗に結節状鱗が混じらない。奄美大島、喜界島、加計呂麻島、請島、与路島には繁殖集団が見られるが、そのいくつかでは近年、同属の外来種ホオグロヤモリの北上に伴う帰化競争(56)による個体数の減少が示唆されている。そのため今回、新たにレッドリストに掲載された。ただし、こうした競争の実態や、本種奄美集団の在来性については、情報が不足している。

【参考文献】 46)、52)、60)、62)、95)、96)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

トカゲ目 トカゲ科

DD (情報不足) [新規掲載]

ツシマスベトカゲ *Scincella vandenburghi* (Schmidt, 1927)

朝鮮半島と対馬に分布する。平地、山地の川沿いや林道沿いの明るい場所に生息し、石や倒木の下から現れることが多い。頭胴長40～50mm、尾長は頭胴長よりやや長い。足が短く土中や堆積物中を縫うように動く。体表は滑らかで光沢がある。背面は暗褐色で体側は帯状に黒褐色。初夏に1～9卵を産卵する。地中生活が主であり、生態について不明な点が多いが、好適な生息環境が多い丘陵地の沢や林道周辺の整備、谷開口部の開発が急速に進み、生息地の消失が推定されることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 1)、40)

執筆者：竹中 踐 (東海大学生物理工学部)

トカゲ目 ヘビ科

DD (情報不足) [新規掲載]

ダンジョヒバカリ *Amphiesma vibakari danjoense* Toriba, 1986

日本固有亜種。長崎県の男女群島の男島のみ固有分布。ガレ場や林内に生息し、腐葉土など柔らかく湿気のある底質を好む。全長 181~342mm。体鱗はキールをもち、頸部で 19 列、胴中央と肛門前では 17 列。腹板 127~134 枚、尾下板は 2 分し 88~89 対前後。頭部は暗褐色、胴部は淡褐色で背側に 2 本の明色斑の縦列が走り、黒褐色の斑点も散らばる。産地が面積 3 km² 程度の 1 島嶼に局限されており (61) 存続については注視する必要があるため、今回、新たにレッドリストに掲載された。ただし、この産地は無人島であるため急激な生息環境の悪化等は考えにくく、まずは生息状況に関する情報の収集が必要である。

【参考文献】 39)、94)、101)、103)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [新規掲載]

トカゲ目 ヤモリ科

大東諸島のオガサワラヤモリ

Lepidodactylus lugubris (Duméril & Bibron, 1836)

単為生殖を行う全雌種で、多くのクローン系統から成る。種としては太平洋とインド洋の熱帯・亜熱帯島嶼に広く分布している。国内では小笠原諸島、琉球列島、大東諸島に見られるが、このうち大東諸島の個体群だけが在来で、固有のクローンを多数含んでいる。全長 80~110mm。背面を覆う鱗は細かく顆粒状で、大型の結節状鱗は見られない。前・後肢ともに第一指は他の指に比べて発達が悪く、末端にかぎ爪がない。指下板は、末端の 3~5 枚のみ左右に 2 分する。地色は淡褐色ないし灰褐色で、背面には黒色の斑紋が散らばる。餌は昆虫をはじめとした小型の節足動物で、産卵はほぼ 1 年中見られ、親は 1 度に 2 卵を、剥離しかけた樹皮の下などに産みつける。

大東諸島では近年、幼体の捕食者であり成体の競合者でもある外来種ホオグロヤモリが増加しており (52, 56)、その影響からか生息密度の低下や生息場所の縮小、クローン多様性の低下が認められ、すでにきわめて稀にしか見られないクローンもいる。このような理由から今回、新たにこの個体群がレッドリストに掲載された。

【参考文献】 54)、62)、101)、104)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [新規掲載]

トカゲ目 カナヘビ科

沖永良部島、徳之島のアオカナヘビ

Takydromus smaragdinus (Boulenger, 1887)

日本固有種。南西諸島のトカラ列島の宝島から奄美諸島、沖縄諸島にかけて分布。草地や林道周辺の林辺に生息する。全長 200~300mm、頭胴長 50~70mm。背面は緑色または若草色で、雄の側面は帯状に褐色。頭側から腰まで細い白条が通る。4~8 月初旬にかけて数回ふつう 2 卵を産卵する。

土地開発 (23) による生息地の減少のほか、畑周辺の環境悪化や人為移入されたマングースやイタチといった外来捕食者 (54) の影響によって各島嶼で減少が見られている。とくに減少が著しい沖永良部島と徳之島の個体群について、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 79)、80)、99)

執筆者：竹中 踐 (東海大学生物理工学部)

EN (絶滅危惧IB類) [新規掲載]

サンショウウオ目 サンショウウオ科

アカイサンショウウオ

Hynobius katoi Matsui, Kokuryo, Misawa & Nishikawa, 2004

日本固有種。分布域は赤石山脈南端に沿った狭い範囲に限られる。標高500~1,200mにある森林の、小さな溪流源流域付近の礫の多い斜面で生活する。全長は92~117mm。肋条数は13本ことが多い。鋤骨歯列は浅いU字型。尾は円筒形だが、末端で側偏する。背面は紫褐色で、部分的に小さな銀白色斑点をもつことがある。腹面は淡褐色で、のどに斑点をもつ。4~5月上旬頃に、山地溪流の水源にある伏流水の中で繁殖すると推定されるが、野外で卵や幼生が確認されたことはまだない。幼生も地下で生活するのだろう。1雌のもつ卵数は9~13個ときわめて少ない。

生息域での林道の建設(24)、樹木の伐採(11)、植林などが生存に影響していると思われるが現在の状況はよくわかっていない。また、ペットとしての捕獲・採取(41)が危惧される。2004年に新種記載され、今回、新たにレッドリストに掲載された。長野県の指定希少野生動植物。

【参考文献】 28)、29)、32)

執筆者：松井正文(京都大学大学院人間・環境学研究科)

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

サンショウウオ目 サンショウウオ科

オオダイガハラサンショウウオ

Hynobius boulengeri (Thompson, 1912)

日本固有種。本州の近畿地方南部、四国、九州の祖母山地と大隅半島、天草島の山地に分布し、森林で生活する。全長は200mmに達することもあるが、大隅半島・天草島産は小型。鋤骨歯列はU字形に近いV字形で、本州・九州産は四国産より長い。尾は著しく側偏する。背面は一様な石板色でほとんど斑紋をもたない。2~5月に山地溪流の源流近くで繁殖し、日光の差し込まない場所に産卵する。産卵数は17~47個程度。幼生は水中で成長・発育し、一部は年内、多くは越冬して翌年に変態するが、翌々年に変態するものもある。

生息域での山岳道路(24)、砂防堰堤の建設(25)、森林伐採(11)と、それに伴う土砂の溪流への流入や、観光地化による水質汚濁(31)のような生息環境の破壊が種の存続を脅かしている。また、ペットとしての捕獲・採取(41)が危惧される。

従来、本州と九州の個体群が「絶滅のおそれのある地域個体群」としてレッドリストに掲載されていたが、それぞれが遺伝的にきわめて大きく異なるため、今回、種全体が掲載された。奈良、大分、三重県の天然記念物に指定されている。

【参考文献】 22)、26)、44)、47)、48)、49)、50)、66)

執筆者：松井正文(京都大学大学院人間・環境学研究科)

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

サンショウウオ目 サンショウウオ科

カスミサンショウウオ

Hynobius nebulosus (Temminck & Schlegel, 1838)

日本固有種。岐阜県以西の本州と、四国・九州の一部に分布し、丘陵地から山地で生活する。全長は70～125mm程度。肋条数は13本のことが多い。鋤骨歯列はV字型。尾は側偏する。背面は緑褐色、淡灰褐色、暗褐色などで細かい褐色の斑点を散布する個体が多いが、山地性の個体群ではブチサンショウウオに似る。尾の上縁に明瞭な黄色条線をもつのが普通。12～5月上旬に湿地、水田の溝、浅い池や沼、流れの緩やかな小さな沢で繁殖する。産卵数は50～180個。

土地開発(15、16、23、24)による生息地の消失、それに伴う汚水の流入(31)、減反による水田の乾燥化などにより、各地で激減している。ペットとしての捕獲・採取(41)、アメリカザリガニや外来の捕食性魚類も脅威となっている。

従来、愛知県(トウキョウサンショウウオとして)と、京都・大阪の個体群が「絶滅のおそれのある地域個体群」としてレッドリストに掲載されていたが、各地の個体群が遺伝的にきわめて大きく異なるため、今回、種全体が掲載された。

【参考文献】 23)、27)、36)、37)、65)、69)、81)

執筆者：松井正文(京都大学大学院人間・環境学研究所)

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

サンショウウオ目 サンショウウオ科

トウキョウサンショウウオ

Hynobius tokyoensis Tago, 1931

日本固有種。群馬県を除く関東地方と福島県の太平洋沿岸の一部の地域に分布。海岸付近から標高300mまでの丘陵の森林に生息。全長は80～130mm程度。体色は黄褐色から黒褐色まで変異に富むが、ふつうは暗褐色のことが多い。体側や腹に青白色の小点が密に分布する。四肢が短く、体を伸ばし前後肢を近づけても指が接し合わない。肋条はふつう12本。1～4月の早春、山間の水田や湧き水の溜まり水などの止水に集まり繁殖する。卵は直径2.1～3.4mm(平均2.7mm)、産卵数は15～192(平均80弱)。孵化した幼生はその年の秋までに変態し上陸する。その後周囲の森林の林床に広く分散し、3～5年で性成熟する。

丘陵開発等による生息地破壊、谷戸田の休耕田化に伴う乾燥化による繁殖場環境の悪化、さらに最近では外来種アライグマによる繁殖個体及び卵の捕食(52)などにより、各地で繁殖集団の減少・分断化が急速に進行している。

従来、東京都と愛知県の個体群が「絶滅のおそれのある地域個体群」としてレッドリストに掲載されていたが、愛知県産はカスミサンショウウオであることが判明し、今回、東京都以外も含む種全体が掲載された。

【参考文献】 17)、33)、65)

執筆者：草野 保(首都大学東京大学院理工学研究科)

カエル目 アカガエル科

ヤエヤマハラブチガエル*Rana psaltes* Kuramoto, 1985

台湾と南琉球の固有種で、国内では八重山諸島の石垣島と西表島に分布する。一年を通して湿潤な場所を好み、おもに耕作地の周辺や山裾にある草の茂った湿地（休耕田を含む）に生息するが、丘陵地の河川周辺などに点在する小規模な池沼にも見られる。全長42～44mm。体型は頑健で、吻端はやや突出する。背側線隆条は細いが明瞭。上唇から前肢付け根の上部にかけて白線が走り、この白線と背側線隆条の前部、眼、眼鼻線に囲まれた領域は暗褐色。胴部は腹面を除き褐色。前肢基部後方に扁平な皮膚隆起をもつ。8～10月に水場周辺の湿った泥質に浅い穴を掘り、その中に産卵する。孵化した幼生は降雨による増水を利用して、水場に到達する。

近年、森林伐採(11)や河川開発(13)に伴う土地の乾燥化、湿地や草地の開発(15, 16)、土地造成(23)、道路工事(24)、水質汚濁(32)、踏みつけ(51)、そしておそらくは農薬汚染(32)の影響により、急激な生息地の縮小、生息密度の低下が認められる。そのため今回、新たにレッドリストに掲載された。

※なお本種の学名は、正式にはこれまでリュウキュウアカガエルに適用されてきた *Rana okinavana* Boettger, 1895 を当てるべきであることが近年の研究から明らかになっているが(文献30)、ここでは混乱を避けるため学名を従来のものに留めておく。

【参考文献】 15)、18)、30)

執筆者：太田英利(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

サンショウウオ目 サンショウウオ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

クロサンショウウオ *Hynobius nigrescens* Stejneger, 1907

日本固有種。東北・北陸と、関東・中部の一部の、海岸近くから標高2,500m以上にまで生息する。全長120～190mm。鋤骨歯列はU字型のことが多く、四肢は長くて、尾は側偏する。背面は褐色か緑褐色で濃褐色の小さな斑点をもつことがある。2～7月頃に池、沼、水路などで繁殖し、白くて、紡錘型の卵囊対を産み出す。産卵数は20～70個。水田整備、農薬散布(32)、ゴルフ場化(21)、観光地化、森林伐採(11)、林道工事(24)など生息地の破壊が生存に悪影響を及ぼしていることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 9)、11)、31)、65)、82)

執筆者：松井正文(京都大学大学院人間・環境学研究科)

サンショウウオ目 サンショウウオ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

ツシマサンショウウオ *Hynobius tsuensis* Abe, 1922

日本固有種。対馬に分布。平地から丘陵の森林の小さな溪流周辺に生息する。全長109～142mm、頭胴長58～75mm。肋条数は13本、鋤骨歯列は深いV字型。尾の背稜が胎色。3～4月頃に産卵し、ゆるやかな溪流の浅い水中の石の下などに卵囊が産みつけられる。幼生は溪流中で生活し、その年の秋ないし翌年に変態・上陸する。沢の砂防堰堤建設や周辺の樹林伐採(11)が進んでいるほか、丘陵の谷の開口部の舗装道路の建設(24)、宅地化などの開発が進み、好適な生息環境が失われてきていることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 40)、71)

執筆者：竹中 踐(東海大学生物理工学部)

サンショウウオ目 サンショウウオ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

トウホクサンショウウオ *Hynobius lichenatus* Boulenger, 1883

日本固有種。東北地方と新潟・群馬・栃木・茨城各県に分布し、海岸近くから標高 1,500mまでに生息する。全長 90~140mm。鋤骨歯列はU字型のことが多く、四肢は長くて、尾は側偏する。背面は褐色で青白色の小さな斑点をもつことが多い。1~6月に小さな溪流や、水路、池の流入口などで繁殖し、条線のある卵囊対を産み出す。産卵数は20~100個。分布域内で遺伝的分化が進んでいる。森林伐採(11)、林道工事(24)、コンクリートU字溝の設置、湿地の乾燥化、山間地の細流や湧水周辺の工事(13)などが、生存に悪影響を及ぼしていることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 10)、12)、16)、65)

執筆者：松井正文(京都大学大学院人間・環境学研究科)

サンショウウオ目 サンショウウオ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

ヒダサンショウウオ *Hynobius kimurae* Dunn, 1923

日本固有種。関東から中国までの標高 35~1,800mの山地森林の、小さな溪流の付近で生活する。全長 101~184mm。鋤骨歯列は深いU字型で、四肢は短く、尾は円筒形。背面は紫褐色で黄色の斑点があり、腹面には斑点がない。2~4月頃に源流近くで繁殖し、虹色光沢のある強靱な卵囊対を産み出す。産卵数は13~51個。分布域の東西で遺伝的分化が進んでおり、また砂防堰堤・林道の建設(24)、樹木伐採(11)、水質汚濁(31)などが生存に悪影響を及ぼしていることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 24)、35)、42)、43)、65)、70)

執筆者：松井正文(京都大学大学院人間・環境学研究科)

サンショウウオ目 サンショウウオ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

ブチサンショウウオ *Hynobius naevius* (Temminck & Schlegel, 1838)

日本固有種。岐阜県以西の本州(京都府・兵庫県を除く)、四国、九州の山地森林に分布。大(全長91~140mm)・小(88~131mm)の遺伝的に異なる2型を含み、別種として区別される予定である。背面は、大型では茄子紺色の地に銀白色の斑紋が、小型では褐色の地に黄白色か黄色の斑紋がある。腹にも斑紋がある。鋤骨歯列はV字型。幼生は、大型は溪流中で、小型は地下の伏流水中で暮らす。道路建設(24)、ダム建設(25)、砂防ダムへの土砂堆積(53)、森林伐採(11)が、生存に悪影響を及ぼしていることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 14)、25)、34)、63)、65)、89)、90)、91)、92)、93)

執筆者：松井正文(京都大学大学院人間・環境学研究科)

サンショウウオ目 イモリ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

アカハライモリ *Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)

日本固有種。本州、四国、九州の低地から山地に分布。水田、池、溪流、溝などで生活する。全長 70~140mm。背面は黒褐色で、腹面は赤色に黒色の斑紋がある。4~7月に求愛(体内受精、秋にも行う)・繁殖し、卵を一粒ずつ、水草などに産み付ける。各地で遺伝的分化が進んでいる。水田整備、耕作方法の変化、用水路・溝のコンクリート化、農薬散布(32)、水質悪化(31)、乱開発による生息地の消滅(15、16、23)、乱獲(41)などにより、各地で生息数が激減していることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 2)、3)、4)、65)

執筆者：松井正文(京都大学大学院人間・環境学研究科)

カエル目 ヒキガエル科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

ミヤコヒキガエル *Bufo gargarizans miyakonis* Okada, 1931

日本固有亜種。宮古諸島の宮古島、伊良部島に在来分布するほか、南・北東島にも人為的に移入され定着している。民家の周辺から公園、草地、灌木林などさまざまな環境に見られる。全長60~120mm程度。頭頂部は幅広く扁平で、後肢の水かきは比較的良好に発達している。9~3月には池や水たまりなどで産卵が見られる。かつて宮古島や伊良部島では至る所に高密度で見られたが、湿地の開発(15)、水質汚濁(31)、そして卵や幼生の捕食者となる外来魚の放逐・拡散(52)などにより近年、これら在来の分布地で密度が著しく低下している。このような理由から今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 18)、62)、101)

執筆者：太田英利 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

カエル目 アカガエル科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

トウキョウダルマガエル *Rana porosa porosa* (Cope, 1868)

日本固有亜種。関東平野から仙台平野にかけて、および新潟県と長野県の一部に分布する。また、北海道の一部に人為分布する。体長は雄で39~75mm、雌で43~87mm。水田や池沼、小河川などに生息する。繁殖期は4~7月。オタマジャクシは7~9月に変態する。都市化による水田の減少や耕作放棄(53)による水田環境変化に伴い、各地で急速に減少しつつある。すでに関東平野では、孤立した局所個体群になっている生息地が多い。今後も生息地の減少が予測され、さらに稲の生育期間の短縮や中干しの増加など、最近の稲作方法の変化に伴い、残存生息地でも生息環境が悪化傾向にあることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 18)、68)、72)、84)、88)

執筆者：福山欣司 (慶應義塾大学生物学教室)

カエル目 アカガエル科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

チョウセンヤマアカガエル *Rana dybowskii* Günther, 1876

朝鮮半島からロシア沿海州に分布し、国内では対馬に分布する。平地から山間の沢や水田周辺などに生息する。体長52~84mm。ツシマアカガエルより大型で、鼓膜が眼よりやや小さい程度。染色体数は24本。産卵期は2~4月で、水田や浅い池、林道わきの水たまりなどの止水に球形に近い卵塊を産む。河岸の人工的整備(13)、水田放棄などによる生息環境の悪化、丘陵の谷間開口部の舗装道路の建設(24)、土地開発(23)による繁殖地の消失、侵入したヌマガエルやトノサマガエルの影響が懸念されることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 18)、38)、40)、41)

執筆者：竹中 踐 (東海大学生物理工学部)

カエル目 アカガエル科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

ツシマアカガエル *Rana tsushimensis* Stejneger, 1907

日本固有種。対馬に分布。平地から丘陵の水田周辺などに生息する。体長31~44mm。同所的に分布するチョウセンヤマアカガエルより小型で、鼓膜が眼径の半分程度。染色体数は26本。産卵期は1~5月で、水田や浅い池、河岸の水たまりなどの止水に球形に近い卵塊を産む。河岸の人工的整備(13)、水田放棄などによる生息環境の悪化、丘陵の谷間開口部の舗装道路の建設(24)、土地開発(23)による繁殖地の消失、侵入したヌマガエルやトノサマガエルの影響が懸念されることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 18)、40)、41)

執筆者：竹中 踐 (東海大学生物理工学部)

カエル目 アカガエル科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

リュウキュウアカガエル *Rana okinavana* Boettger, 1895

日本固有種。久米島、沖縄島、徳之島、奄美大島に分布する。おもに湿潤な照葉樹林の林床に生息するが、島によってはより開けた環境にも見られる。全長は雄で34~41mm、雌では42~49mm。吻端は尖り、背面の皮膚には多数の細かい顆粒がある。背面は赤みないし黄みを帯びた淡褐色で、上唇には明瞭な白条がある。腹面は白色ないし象牙色で、淡い赤褐色の網目状の模様が現れることがある。近年、森林伐採(11)に伴う生息地の縮小、ダム建設(25)に伴う繁殖場の喪失、外来性捕食者(マングース)の侵入(52)などの影響で個体数の減少が懸念されるため、今回、新たにレッドリストに掲載された。

※なお近年の研究から、従来本種に適用されてきた学名がヤエヤマハラブチガエルに対して当てられるべきものであることが示されているが(文献30)、ここでは混乱を避けるため従来の用法に留めておく。

【参考文献】 18)、30)、62)、101)

執筆者：太田英利(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)

サンショウウオ目 サンショウウオ科

DD (情報不足) [新規掲載]

エゾサンショウウオ *Hynobius retardatus* Dunn, 1923

日本固有種。北海道に分布。平地から山地まで沼沢地周辺に生息する。体色は暗褐色または茶褐色。繁殖期の雄は尾がひれ状になり体側の皮膚がたるむ。全長110~185mm、頭胴長60~87mm。肋条数は11本。染色体数は40本。繁殖期はふつう4~5月だが、高地では7月。止水や流れのゆるい流水中で産卵し、湖沼や沢だまり湿地など、多様な環境で繁殖する。丘陵地の牧草地化や土地開発(23)などで生息地、繁殖地の減少が進み、外来種のアライグマの捕食(52)の影響が確認されていることから、今回、新たにレッドリストに掲載された。

【参考文献】 8)、77)、102)

執筆者：竹中 踐(東海大学生物理工学部)

付属説明資料 爬虫類・両生類 参考文献

- 1) Chen, S.-L., T. Hikida, S.-H. Han, J.-H. Shim, H.-S. Oh, and H. Ota, 2001. Taxonomic status of the Korean populations of the genus *Scincella* (Squamata: Scincidae). *J. Herpetol.*, 35: 122-129.
- 2) 林光武, 1996. イモリ. 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏 (編), 日本動物大百科5 両生類・爬虫類・軟骨魚類, pp. 24, 27. 平凡社, 東京.
- 3) Hayashi, T. and M. Matsui, 1988. Biochemical differentiation in Japanese newts, genus *Cynops* (Salamandridae). *Zool. Sci.*, 5(5): 1121-1136.
- 4) Hayashi, T. and M. Matsui, 1990. Genetic differentiations within and between two local races of the Japanese newt, *Cynops pyrrhogaster*, in eastern Japan. *Herpetologica*, 46(4): 423-430.
- 5) 比婆科学教育振興会, 1996. イシガメ. 広島県の両生・爬虫類, pp.112-115. 中国新聞社, 広島.
- 6) 北海道環境生活部編, 2001. 両生類・爬虫類. 北海道の希少野生生物: 北海道レッドデータブック 2001, pp. 191-195. 北海道.
- 7) Honda, M., T. Okamoto, T. Hikida, and H. Ota, 2008. Molecular phylogeography of the endemic five-lined skink (*Plestiodon marginatus*) (Reptilia: Scincidae) of the Ryukyu Archipelago, Japan, with special reference to the relationship of a northern Tokara population. *Pacific Sci.*, 62(3): 351-362.
- 8) 堀繁久・水島末記, 2002. 野幌森林公園の両生類について. 北海道開拓記念館紀要, 30: 21-26.
- 9) 岩沢久彰, 1979. クロサンショウウオ、サドサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書 (両生類・は虫類) 全国版, pp. 69-75. 環境庁.
- 10) 岩沢久彰, 1979. トウホクサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書 (両生類・は虫類) 全国版, pp. 65-68. 環境庁.
- 11) 岩沢久彰, 1981. クロサンショウウオ、サドサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書 (両生類・は虫類) 全国版 (その2), pp. 109-122. 日本自然保護協会, 東京.
- 12) 岩沢久彰, 1981. トウホクサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書 (両生類・は虫類) 全国版 (その2), pp. 101-108. 日本自然保護協会, 東京.
- 13) Kato, J., H. Ota, and T. Hikida, 1994. Biochemical systematics of the *latiscutatus* species-group of the genus *Eumeces* (Scincidae: Reptilia) from East Asian islands. *Biochem. Syst. Ecol.*, 22: 491-500.
- 14) 倉本満, 1979. ブチサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書 (両生類・は虫類) 全国版, pp.86-89. 環境庁.
- 15) Kuramoto, M., 1985. A new frog (genus *Rana*) from the Yaeyama Group of the Ryukyu Islands. *Herpetologica*, 41: 150-158.
- 16) 草野保, 1996. トウホクサンショウウオ. 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏 (編), 日本動物大百科5 両生類・爬虫類・軟骨魚類, p. 21. 平凡社, 東京.
- 17) 草野保・川上洋一, 1999. トウキョウサンショウウオは生き残れるか?: 東京都多摩地区における生息状況調査報告書. トウキョウサンショウウオ研究会, 東京. 69pp.
- 18) 前田憲男・松井正文, 1999. 改訂版 日本カエル図鑑. 文一総合出版, 東京. 223pp.
- 19) 増永元, 2005. エラブウミヘビ, ヒロオウミヘビ. 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ -, pp. 129-131. 沖縄県文化環境部自然保護課.
- 20) Masunaga, G. and H. Ota, 2003. Growth and reproduction of the sea snake, *Emydocephalus ijimae*, in the Central Ryukyus, Japan: a mark and recapture study. *Zool. Sci.*, 20: 461-470.
- 21) Masunaga, G., R. Matsuura, T. Yoshino, and H. Ota, 2003. Reproductive biology of the viviparous sea snake *Emydocephalus ijimae* (Reptilia: Elapidae: Hydrophiinae) under a seasonal environment in the Northern Hemisphere. *Herpetol. J.*, 13: 113-119.
- 22) 松井正文, 1981. オオダイイガラサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書 (両生類・は虫類)

- 全国版(その2), pp. 171-178. 日本自然保護協会, 東京.
- 23) 松井正文, 1981. カスミサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(両生類・は虫類) 全国版(その2), pp. 71-77. 日本自然保護協会, 東京.
 - 24) 松井正文, 1981. ヒダサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(両生類・は虫類) 全国版(その2), pp. 151-158. 日本自然保護協会, 東京.
 - 25) 松井正文, 1981. ブチサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(両生類・は虫類) 全国版(その2), pp. 143-150. 日本自然保護協会, 東京.
 - 26) 松井正文, 1995. オオダイガハラサンショウウオ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(II), pp. 410-415. 日本水産資源保護協会, 東京.
 - 27) 松井正文, 2000. 京都・大阪地域のカスミサンショウウオ. 環境庁(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—(爬虫類・両生類), pp. 104-105. 自然環境研究センター, 東京.
 - 28) 松井正文, 2004. アカイシサンショウウオの発見と新種記載について. ハ・ペト・ロジー, 2: 110.
 - 29) 松井正文, 2006. 小型サンショウウオ. 森林技術, 774: 38-39.
 - 30) Matsui, M., 2007. Unmasking *Rana okinavana* Boettger, 1895 from the Ryukyus, Japan (Amphibia: Anura: Ranidae). Zool. Sci., 24: 199-204.
 - 31) Matsui, M., H. Iwasawa, H. Takahashi, T. Hayashi, and M. Kumakura, 1992. Invalid specific status of *Hynobius sadoensis* Sato: Electrophoretic evidence (Amphibia: Caudata). J. Herpetol., 26(3): 308-315.
 - 32) Matsui, M., Y. Kokuryo, Y. Misawa, and K. Nishikawa, 2004. A new species of salamander of the genus *Hynobius* from central Honshu, Japan (Amphibia, Urodela). Zool. Sci., 21(6): 661-669.
 - 33) 松井正文・草野 保, 1997. トウキョウサンショウウオ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(IV), pp. 292-302. 日本水産資源保護協会, 東京.
 - 34) 松井正文・見澤康充, 1996. ブチサンショウウオ. 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏(編), 日本動物大百科5 両生類・爬虫類・軟骨魚類, pp. 19-23. 平凡社, 東京.
 - 35) Matsui, M., Y. Misawa, K. Nishikawa, and S. Tanabe, 2000. Allozymic variation of *Hynobius kimurae* Dunn (Amphibia, Caudata). Comp. Bioch. Physiol. B, 125(1): 115-125.
 - 36) Matsui, M., K. Nishikawa, S. Tanabe, and Y. Misawa, 2001. Systematic status of *Hynobius tokyoensis* (Amphibia: Urodela) from Aichi Prefecture, Japan: A biochemical survey. Comp. Bioch. Physiol. B, 130: 181-189.
 - 37) Matsui, M., K. Nishikawa, T. Utsunomiya, and S. Tanabe, 2006. Geographic allozyme variation in the Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Urodela). Biol. J. Linn. Soc., 89: 311-330.
 - 38) Matsui, M., T. Tanaka-Ueno, N.-K. Paik, S.-Y. Yang, and O. Takenaka, 1998. Phylogenetic relationships among local populations of *Rana dybowskii* assessed by mitochondrial cytochrome b gene sequences. Jpn. J. Herpetol., 17(4) : 145-151.
 - 39) 松尾公則, 1994. 男女群島の爬虫類・哺乳類. 長崎県生物学会誌, 44: 22-28.
 - 40) 松尾公則, 2005. 長崎県の両生・爬虫類. 長崎新聞社, 長崎. 150pp.
 - 41) 松尾公則・富樫忠士・三谷奈保・藤田有希, 2004. 長崎県老岐・対馬に侵入したヌマガエル. 爬虫両棲類学会報, 2004(1): 61-62 (講演要旨).
 - 42) Misawa, Y. and M. Matsui, 1997. Larval life history variation in two populations of the Japanese salamander *Hynobius kimurae* (Amphibia, Urodela). Zool. Sci., 14(2): 257-262.
 - 43) Misawa, Y. and M. Matsui, 1999. Age determination by skeletochronology of the Japanese salamander *Hynobius kimurae* (Amphibia, Urodela). Zool. Sci., 16(5): 845-851.
 - 44) 森川国康, 1979. オオダイガハラサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(両生類・は虫類) 全国版, pp. 100-103. 環境庁.
 - 45) Motokawa, J., M. Toyama, and T. Hikida, 2001. Genetic relationships of a morphologically unique population of the genus *Eumeces* (Scincidae: Squamata) from Iotorishima Island, Ryukyu Archipelago, as revealed by allozyme data. Curr. Herpetol., 20: 69-76.

- 46) 中村健児・上野俊一, 1963. 原色日本両生爬虫類図鑑. 保育社, 大阪. 214pp.
- 47) Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe, and S. Sato, 2001. Geographic enzyme variation in a Japanese salamander, *Hynobius boulengeri* Thompson (Amphibia: Caudata). *Herpetologica*, 57(3): 281-294.
- 48) Nishikawa, K., M. Matsui, and S. Tanabe, 2005. Biochemical phylogenetics and historical biogeography of *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri* (Amphibia: Caudata) from the Kyushu region, Japan. *Herpetologica*, 61(1): 54-62.
- 49) Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe, and M. Sakamoto, 2003. Occurrence of a lotic breeding *Hynobius* salamander (Amphibia, Urodela) on Kamishima of the Amakusa Islands, Japan. *Curr. Herpetol.*, 22(1): 1-8.
- 50) Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe, and S. Sato, 2007. Morphological and allozymic variation in *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri* (Amphibia: Urodela: Hynobiidae). *Zool. Sci.*, 24(7): 752-766.
- 51) 太田英利, 1981. 波照間島の爬虫両生類相. *爬虫両棲類学雑誌*, 9: 54-60.
- 52) Ota, H., 1986. A review of reptiles and amphibians of the Amami Group, Ryukyu Archipelago. *Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ. (Biol.)*, 11: 57-71.
- 53) Ota, H., 1991. Taxonomic re-definition of *Japalura swinhonis* Günther (Agamidae: Squamata), with a description of a new subspecies of *J. polygonata* from Taiwan. *Herpetologica*, 47: 280-294.
- 54) Ota, H., 1994. Female reproductive cycles in the northernmost populations of the two gekkonid lizards, *Hemidactylus frenatus* and *Lepidodactylus lugubris*. *Ecol. Res.*, 9: 121-130.
- 55) 太田英利, 1995. エラブウミヘビ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (II), pp. 463-468, 479. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 56) 太田英利, 1997. イイジマウミヘビ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (IV), pp. 331-337, 345. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 57) Ota, H., 2003. A new subspecies of the agamid lizard, *Japalura polygonata* (Hallowell, 1861) (Reptilia: Squamata), from Yonagunijima Island of the Yaeyama Group, Ryukyu Archipelago. *Curr. Herpetol.*, 22(2): 61-71.
- 58) Ota, H., 2004. Notes on the reproduction and variation in the blue-tailed lizard, *Eumeces elegans* (Reptilia: Scincidae), on Kita-kojima Island of the Senkaku Group, Ryukyu Archipelago. *Curr. Herpetol.*, 23(1): 37-41.
- 59) Ota, H., A. Ito, and J.-T. Lin, 1999. Systematics review of the elapid snakes allied to *Hemibungarus japonicus* (Gunther, 1868) in the East Asian Islands, with description of a new subspecies from the Central Ryukyus. *J. Herpetol.*, 33: 675-687.
- 60) 太田英利・岡田滋, 2003. 爬虫類・両生類. 財団法人鹿児島県環境技術協会 (編), 鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動物植物 動物編 一鹿児島県レッドデータブック, pp. 82-116. 財団法人鹿児島県環境技術協会, 鹿児島.
- 61) Ota, H., N. Sakaguchi, S. Ikehara, and T. Hikida, 1993. The herpetofauna of the Senkaku Group, Ryukyu Archipelago. *Pacific Sci.*, 47: 248-255.
- 62) Ota, H., Mi. Toda, G. Masunaga, A. Kikukawa, and Ma. Toda, 2004. Feral populations of amphibians and reptiles in the Ryukyu Archipelago, Japan. *Glob. Environ. Res.*, 8(2): 133-143.
- 63) Sakamoto, M., K. Nishikawa, and M. Matsui, 2005. Two types of *Hynobius naevius* from the Central region of Kyushu Island, Japan (Caudata: Hynobiidae). *Curr. Herpetol.*, 24(2): 67-77.
- 64) Sato, H., and H. Ota, 1999. False biogeographical pattern derived from artificial animal transportations: a case of the soft-shelled turtle, *Pelodiscus sinensis*, in the Ryukyu Archipelago, Japan. In: H. Ota (ed.), *Tropical Island Herpetofauna: Origin, Current Diversity, and Conservation*, pp. 317-334. Elsevier Science, Amsterdam.
- 65) 佐藤井岐雄, 1943. 日本産有尾類総説. 日本出版社, 大阪. 520pp.
- 66) 佐藤真一, 1954. 九州に産するオオダイガハラサンショウウオ (*Pachypalaminus boulengeri* Thompson) について. *動物学雑誌*, 63(5): 195-199.
- 67) Schulz, K.-D., 1996. A monograph of the colubrid snakes of the genus *Elaphe* Fitzinger. Koeltz Scientific Books, Havlickuv Brod. 439pp.
- 68) 芹沢孝子・芹沢俊介, 1990. トノサマガエルーダルマガエル複合群の繁殖様式. トウキョウダルマガエルの性成熟と産卵. *爬虫両棲類学雑誌*, 13(3): 70-79.

- 69) 柴田保彦, 1979. カスミサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(両生類・は虫類) 全国版, pp. 46-49. 環境庁.
- 70) 柴田保彦, 1979. ヒダサンショウウオ. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(両生類・は虫類) 全国版, pp. 90-91. 環境庁.
- 71) 柴田保彦, 1982. ツシマサンショウウオ. 環境庁(編), 日本の重要な両生類・は虫類の分布 全国版, pp. 79-80. 大蔵省印刷局, 東京.
- 72) Shimoyama, R., 1989. Breeding Ecology of a Japanese Pond Frog, *Rana porosa*. In: M. Matsui, T. Hikida, and R. Goris (eds.), Current Herpetology in East Asia, pp. 323-331. Herpetological Society of Japan, Kyoto.
- 73) 鈴木晶子, 2000. 小笠原諸島における、移入種と在来種のトカゲ2種の関係. 奈良女子大学人間文化研究科生活環境学専攻・平成11年度学位論文. 76pp.
- 74) Takeda, N. and H. Ota, 1996. Description of a new species of *Takydromus* from the Ryukyu Archipelago, Japan, and a taxonomic redefinition of *T. smaragdinus* Boulenger 1887 (Reptilia: Lacertidae). Herpetologica, 52 : 77-88.
- 75) 竹中踐, 1987. 対馬産アムールカナヘビとツシマスベトカゲについて. 対馬の自然, pp. 161-173. 長崎県.
- 76) Takenaka, S., 1989. Reproductive ecology of Japanese lacertid lizards. In: M. Matsui, T. Hikida, and R. Goris (eds.), Current Herpetology in East Asia, pp.364-369. Herpetological Society of Japan, Kyoto.
- 77) 竹中踐, 1993. 爬虫類・両生類相とその分布. 東正剛・阿部永・辻井達一(編), 生態学からみた北海道, pp. 198-208. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
- 78) 竹中踐, 1996. 北海道の両生類と爬虫類の保護の課題. 北方林業, 48(2): 7-10.
- 79) 竹中踐, 2006. 沖永良部島のアオカナヘビについて. 爬虫両棲類学会報, 2006(1): 24-26.
- 80) 竹中踐・森ロー・林聡彦, 2004. 奄美諸島におけるアオカナヘビの生息分布の現状. 爬虫両棲類学会報, 2004(1): 38 (講演要旨).
- 81) 田辺真吾・松井正文, 1997. カスミサンショウウオ(京阪個体群). 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(IV), pp. 287-291. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 82) 田中清裕, 1996. クロサンショウウオ. 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏(編), 日本動物大百科5 両生類・爬虫類・軟骨魚類, p. 22. 平凡社, 東京.
- 83) 田中聡, 2005. サキシマキノボリトカゲ, ヨナグニキノボリトカゲ. 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)ーレッドデータおきなわー, pp. 119-120. 沖縄県文化環境部自然保護課.
- 84) 栃木県自然環境調査研究会両生爬虫類部会編, 2001. とちぎの両生類・爬虫類. 栃木県林務部自然環境課. 146pp.
- 85) 戸田守, 2008. オキナワヤモリとミナミヤモリの識別点について(予報). Akamata, 19: 23-30.
- 86) Toda, M., T. Hikida, and H. Ota, 2001. Discovery of sympatric cryptic species within *Gekko hokouensis* (Gekkonidae: Squamata) from the Okinawa Islands, Japan, by use of allozyme data. Zool. Scr., 30: 1-11.
- 87) Toda, M., S. Sengoku, T. Hikida, and H. Ota, 2008. Descriptions of two new species of the genus *Gekko* (Squamata: Gekkonidae) from the Tokara and Amami Island Groups in the Ryukyu Archipelago, Japan. Copeia, 2008(2): 452-466.
- 88) 戸金大・福山欣司・倉本宣, 2005. 谷戸田におけるトウキョウダルマガエルの体長組成と成長. 爬虫両棲類学会報, 2005: 13-22.
- 89) Tominaga, A., M. Matsui, K. Nishikawa, and S. Sato, 2003. Occurrence of two types of *Hynobius naevius* in northern Kyushu, Japan (Amphibia: Urodela). Zool. Sci., 20(12): 1467-1476.
- 90) Tominaga, A., M. Matsui, K. Nishikawa, S. Tanabe, and S. Sato, 2005. Genetic differentiations of *Hynobius naevius* (Amphibia: Hynobiidae) as revealed by allozyme analysis. Biochem. Syst. Ecol., 33: 921-937.
- 91) Tominaga, A., M. Matsui, K. Nishikawa, S. Tanabe, and S. Sato, 2005. Morphological discrimination of two genetic groups of a Japanese salamander, *Hynobius naevius* (Amphibia, Caudata). Zool. Sci., 22: 1229-1244.
- 92) Tominaga, A., M. Matsui, K. Nishikawa, and S. Tanabe, 2006. Phylogenetic relationships of *Hynobius naevius* (Amphibia: Caudata) as revealed by mitochondrial 12S and 16S rRNA genes. Mol. Phyl. Evol., 38(3): 677-684.
- 93) Tominaga, S. and M. Matsui, 2007. Estimation of the type locality of *Hynobius naevius* (Temminck and Schelegel).

- 1838), a salamander from Japan (Amphibia: Caudata). Zool. Sci., 24: 940-944.
- 94) Toriba, M., 1986. Preliminary study on the systematic status of a Danjo Islands snake. Jpn. J. Herpetol., 11: 124-136.
- 95) 当山昌直, 1976. 宮古群島の両生爬虫類相 (I). 爬虫両棲類学雑誌, 6: 64-74.
- 96) 当山昌直, 1981. 宮古群島の両生爬虫類. 沖縄生物教育研究会誌, 14: 30-39.
- 97) 当山正直, 1981. 宮古群島の哺乳類について. 沖縄生物教育研究会誌, 14: 12-14.
- 98) 当山昌直, 2005. オキナワトカゲ, クメジマハイ, リュウキュウアカガエル. 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ -, pp. 120-121, 128-129, 142-143. 沖縄県文化環境部自然保護課.
- 99) 当山昌直・倉本満・森田忠義・前田憲男, 1989. 奄美大島における両生・爬虫類の分布. 南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究. pp. 163-171. 環境庁自然保護局.
- 100) 当山昌直・太田英利, 1990. 西表島崎山半島における両生・爬虫類の生態的分布. 南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究 (平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書), pp. 167-172. 環境庁自然保護局.
- 101) 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎, 2002. 決定版日本の両生爬虫類. 平凡社, 東京. 335pp.
- 102) 上野俊一, 1982. エゾサンショウウオ. 環境庁 (編), 日本の重要な両生類・は虫類の分布 全国版, pp. 99-101. 大蔵省印刷局, 東京.
- 103) 浦田明夫・山口鉄男, 1973. 男女群島の爬虫類. 長崎県生物学会 (編), 男女群島の生物 (男女群島学術調査報告書), pp. 54-58. 長崎県生物学会, 長崎.
- 104) Yamashiro, S., M. Toda, and H. Ota, 2000. Clonal composition of the parthenogenetic gecko, *Lepidodactylus lugubris*, at the northernmost extremity of its range. Zool. Sci., 17: 1013-1020.
- 105) 安川雄一郎, 1996. 陸生・淡水性カメ類. 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏 (編), 日本動物大百科5 両生類・爬虫類・軟骨魚類, pp.59-61. 平凡社, 東京.
- 106) 饒平名里美・当山正直・安川雄一郎・陳賜隆・高橋健・久貝勝盛, 1998. 宮古諸島における陸棲爬虫両生類の分布について. 平良市総合博物館紀要, 5: 23-38.
- 107) 横畑泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について. 野生生物保護, 5: 1-12.
- 108) Yokohata, Y., Y. Ikeda, M. Yokota, and H. Ishizaki, 2003. The effects of introduced goats on the ecosystem of Uotsuri-Jima, Senkaku Islands, Japan, as assessed by remote-sensing techniques. Biosphere Conserv., 5: 39-46.
- 109) Zhao, E.-M. and K. Adler, 1993. Herpetology of China. Society for the Study of Amphibians and Reptiles, Oxford, Ohio. 522pp.

和名索引

[爬虫類]

アオカナヘビ	LP	11
(沖永良部島、徳之島のアオカナヘビ)		
アオスジトカゲ	EN	2
アカマダラ	NT	9
アムールカナヘビ	NT	9
イイジマウミヘビ	VU	7
インガキトカゲ	NT	8
エラブウミヘビ	VU	6
オオシマトカゲ	NT	8
オガサワラトカゲ	NT	8
オガサワラヤモリ	LP	11
(大東諸島のオガサワラヤモリ)		
オキナワトカゲ	NT	9
オキナワヤモリ	NT	7
クメジマハイ	VU	5
コモチカナヘビ	VU	4
サキシマカナヘビ	VU	4
サキシマキノボリトカゲ	NT	8
サキシマスジオ	VU	5
シュウダ	EN	3
タカラヤモリ	NT	7
タシロヤモリ	DD	10
ダンジョヒバカリ	DD	11
ツシマスベトカゲ	DD	10
トカラハブ	NT	9
ニホンイシガメ	DD	10
ニホンスッポン	DD	10
ヒロオウミヘビ	VU	6
ミヤコカナヘビ	EN	2
ヨナグニキノボリトカゲ	VU	3

[両生類]

アカイシサンショウウオ	EN	12
アカハライモリ	NT	15
エゾサンショウウオ	DD	17
オオダイガハラサンショウウオ	VU	12
カスミサンショウウオ	VU	13
クロサンショウウオ	NT	14
チョウセンヤマアカガエル	NT	16
ツシマアカガエル	NT	16
ツシマサンショウウオ	NT	14
トウキョウサンショウウオ	VU	13
トウキョウダルマガエル	NT	16
トウホクサンショウウオ	NT	15
ヒダサンショウウオ	NT	15
ブチサンショウウオ	NT	15
ミヤコヒキガエル	NT	16
ヤエヤマハラブチガエル	VU	14
リュウキュウアカガエル	NT	17

改訂レッドリスト 付属説明資料

爬虫類・両生類

平成 22 年 3 月

編集・発行 環境省自然環境局野生生物課

エコマーク認定の再生紙を使用しています。(古紙含有率 100%)